

令和6年度 教職実践研究フォーラム 2025年3月1日



今年度は、現職教員学生10名と学部卒学生13名の計23名の実践研究報告を5つの分科会に分かれて実施しました。県内外から対面とオンラインで100名を超える参加がありました。

参加者からは「会場を選びながら、自分の興味のある発表について聞くことができ、大変学びになりました」「各実践とも提案性のある内

容であったと思います」

「日々見られる多様な児童の実態にどのように対応するのか、大変参考になりました」といった声をいただきました。



離任の挨拶

「退職にあたり」

香川大学に来て34年、教職大学院を担当して4年が経ち、定年退職を迎えました。教科専門（天文学）であった私が、教職大学院も担当するようになって学んだことは数えきれません。色々な機会に、アクティブラーニング、メタ認知、自己調整学習、STEM/STEAM/STREAMなどの言葉を聞き、少しは判った気がしていましたが、いざ教職大学院の授業でそれらの言葉を使おうとすると、理解していなかったことを認識し、改めて調べ直したこともありました。ゼミでは院生の方々から教えてもらったこともありました。院生の皆さんより私のほうが学んでいた場合も多かったのかもしれません。

院生の皆さんからは、学習意欲の旺盛さや、教育現場の魅力や現場への篤い思いなど、必ずしも言葉のみでは表すことができないものを感じ取り、うらやましく思っていました。また教職大学院担当の先生方からも、教職大学院の活動への並々なぬ意欲を感じておりました。ありがとうございました。今後の皆様のご健康とご活躍、教職大学院の更なる発展をお祈り致します。

「お世話になりました」

定年となりました。たくさんの方々にお世話となりました。教職大学院では、毎年1人ずつ、授業力コースの理科教員を目指す院生さんの授業づくりの指導をするのみにりました。その際も、これまでの教育学研究科の修士課程と違い、理科授業の理論的な基礎研究に当てる時間が十分取れずとまどいました。それでも農学部出身でわざわざ理科教育の実力を身に着けたいと志望してくれた院生をはじめ、毎年、院生たちは現場で役立つ授業研究をしようと一人ひとり自分なりに努力していました。生徒たちにあの先生の理科の授業でよかった、あの先生の授業は本当に面白いし楽しいと言われるようになるように、彼らの今後の精進を願うばかりです。



松村 雅文



笠 潤平



「『学びたい気持ち』に応えてくれた大学院」

このたび本年3月をもって香川大学を退職し、関西の私立大学に転出することとなりました。教職大学院には、とりわけ2020年以降ダブルカウント教員として関わらせていただきました。私自身の歩んだ道を振り返ってみると、学部の卒業と同時に教職に就いたものの何の引き出しも持たない自分に愕然とし、しかし5年間をとにかく夢中で駆け抜けました。そんな私でしたが、その後6年目から2年間、内地留学生として大学院で学んだことが自身にとってかけがえのない大きな存在となっています。研究と向き合った時間、ご指導くださった恩師、様々な年齢・立場・状況ながら奇跡的に同じ空間に集った同期の院生の皆さん。時・空間・人、全てが今の私の生きる源となっています。私にとっては、教師の「学びたい気持ち」を受けとめ、最高の環境を提供してくれたのが大学院でした。

岡田 知也



香川大学の教職大学院は教員養成・研修の高度化を理念として掲げ、そして専任の教員を中心としてご苦勞を重ねながら内容を充実してこられました。これからも多くの現職教員やSMの「学びたい気持ち」に応える存在であり続けることをお祈りいたします。最後になりましたが、これまでのご厚情に心より御礼申し上げます。

令和6年度末をもってご退職される、松村雅文先生、笠潤平先生、転出される岡田知也先生、神野幸隆先生、ありがとうございました。

令和6年度 修了生の声

養護教諭としての成長を支えた 一年間の学び

学校力開発コース 近藤 梢子

教職大学院での一年は、異なる校種や経験年数、立場の人々と意見を交わす中で、これまでの自分には省察の時間が足りなかったことを痛感する機会となりました。振り返る時間の大切さを知ると同時に、知らなかったことを知る楽しさを実感し、子どもたちにも学ぶことを楽しみながら学校生活を送ってほしいと願うようになりました。そのために、自らの振る舞いを見直し、子どもたちや先生方のために何ができるかを考え続けることが、これからの自分に必要だと感じています。また、子どもたちの成長を支えることにやりがいを感じながら、自らも成長し続けられる養護教諭という仕事の魅力を改めて感じられたことも、今後の成長につながる大切な気づきでした。

最後に、研究に協力してくださった置籍校の先生方をはじめ、多くの学びの機会を与えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

「学び」と「出会い」の1年間

授業力開発コース 山本 澄代

教職大学院での学生生活は、私にとって本当に貴重な「学び」と「出会い」にあふれた1年間となりました。授業や議論を通して得た知識は、単なる理論にとどまらず、今の教育課題に対してどうアプローチしていくことが良いか、学校現場の経験だけでは見逃していたことや実践してきたことと理論とのつながりに気付くことで、深く学ぶことができました。

また異なる背景や視点をもつ仲間との出会いが大きな刺激となり、互いに尊重し合いながら成長することもできました。自分の思考や視野が広がることで「学ぶ楽しさ」を存分に感じることもできたことも財産だと感じています。学校現場に戻ってからは、大学院での学びの過程で考えた実践や見方・考え方を生かし、周りの先生方と共に教育活動に取り組んでいきたいと思っています。本当にありがとうございました。

1年間を振り返って

特別支援力開発コース 池田 葵

教職大学院では、特別支援教育に関する専門的な知識を深めるだけでなく、特別支援学校や特別支援教室「すばる」での実習を通じて、子ども一人ひとりの特性に応じた指導の工夫や、多様な学びの在り方について具体的に考えることができました。また、医療機関や療育機関での探究実習では、教育と福祉・医療の連携の重要性を改めて実感し、支援の在り方を多面的に考える機会となりました。さらに、特別支援力開発コースの仲間に加え、他校種や他県の先生方、ストレートマスターの方々との出会いを通して、様々な視点に触れながら学びを深めることができました。この一年の貴重な学びの機会に感謝し、今後も子ども一人ひとりに寄り添いながら、自らも成長し続ける教員でありたいと思います。

修了した院生の活躍

理論と実践の往還

2024年6月に、日本教職大学院協会ジャーナルに掲載された修了生の論文を紹介します。

三垣優子（令和2年度修了生）、山本木ノ実「特別支援教育の視点における小中連携の効果的な方略―実践につながる支援の共有のあり方―」、日本教職大学院協会ジャーナル、1巻、31-48

☆三垣さんは文部科学大臣優秀教職員表彰（分野：特別支援教育）を受賞されました。おめでとうございます。

